

「おや、また会いましたね」

小柄で、日本人とわかる程度の黄色。漫画に出てくる儂くて小動物のようでまつ毛が長くて可愛くて……そんなありふれた女ではない女を私は気に入っていた。

「ああ、こんにちは」

私が声をかけると女は振り返る。声も特別高いとか可愛い訳でもなくて、ただ少し細い、握れば「パキ」と折れてしまいそうな花の「クキ」のようだった。

「最近寒くなってきましたね」

「ええ全く。温泉が気持ちいいですけどもね」

「確かに。人が多いせいで湯船はぬるくなってしまいますが」

「ああ、そうなんですね。私は…」

女が何かを言いかけた時、車が止まる。運転手は「佐々木さん？」と窓から声をかけると、女は頷きそのまま乗り込んだ。

「あ、では…」

私が別れを告げた刹那、威嚇したライトと共に車は走り去っていった。そうか、あの女は佐々木と言って、タクシーで帰っているのか。

贅沢な女だ。

私と佐々木—少し馴れ馴れしいか—は、同じ温泉に通う者同士だった。

なにか特別なふうに言っているが全くそんなことはなく、私がコンビニに入る時店にいる者は皆「同じコンビニに通う者同士」だし、私が電車で帰路に着く時電車にいる者は「同じ電車で帰る者同士」だ。そんな感じで私と佐々木は同じ温泉に通う者同士だった。

勿論男女であるから、混浴などないこの温泉で、いつ交わる機会があったのか。それは、彼女の持っていた傘だった。

白いデザインに、程よく入れられた赤。クレヨンでも、水彩でもなく、変わった描き方のそれを見て、私は思わず呟いてしまった。

「さくらんぼ…」

「えっ？」

これが私と佐々木の出会いだった。

そう、私はその時ものすごく腹が減っていたのだ。

「あ…」

「ふふ、お好きですね。この温泉」

私はよく出入口で彼女と会う。不思議か？意図的だからだ。まあ、世間的に言えば…  
狙っている、のだろうな。

私は生きづらい人生ではなかった。勉強も、運動も、馬鹿にされたものではなかったし、初めて異性から好意を向けられたのは中学生の頃だった。相手の愛が伝わる視線、息遣い、出された手紙…。私は口元を抑え、「ごめん」と返した。

美形だったのだろう。その後も五回はあったし、高校でも幾度か告白された。しかし私は誰とも付き合わなかった。高校二年生にして、ようやく分かった。私がなぜ、初めての時吐き気を催したのか。私は、

「俺、実はお前のこと…」

「…は？いやいや、俺たち友達でしょ？…冗談キツイって…」

同性愛者だったのだ。

世間を知るようになり、今ほど LGBTQ に寛容ではなかった。私はひた隠しにすることしかできなかった。同じような人間は「気持ち悪い」とよく言われたものだが、意味がわからなかった。男とか女とか、そんなの関係ない。ただ私が「素敵だ」と思う人が皆男だっただけだ。

「この温泉の食堂、行ったことありますか？ ラーメンとおにぎりのセットが好きなんですけど…」

「ああ、食べたことあります。私は味噌ラーメンに味玉をトッピングするのが好きで」

「…それは…美味しそうですね」

一瞬動揺したが、すぐに立て直した。なぜなら私は彼女を食堂で見た事がなかったからだ。私はきっと誰よりも彼女を、佐々木を見ているのに。

私がないタイミングで食べたのだろうか。いや、私が彼女と出会う前から彼女はもう食べていたのかもしれない。

何かが喉につっかかったような気がした。味玉ぐらいの大きさだろうか。

その後も他愛のない会話を続けて、佐々木はまたタクシーに乗り込んでいった。

話は戻るが、なぜ同性愛者の私が彼女を落とそうとしているのか。

それは、いわゆる「フツウ」になりたいからだ。

私にはもちろん反骨精神はある。世の中が求める「フツウ」になることが、私の幸せではないとわかっている。

ただ年を取るにつれ、世の中を知るにつれ、私の「嫌だ」だけでは生きていけないこ

とに気づいたのだ。

親もしきりに結婚を勧めてくる。私ももうすぐ三十を超える。視野に入れなければならない。というか、もう相手を見つけているのが「フツウ」なのだ。

親には言っていない。言えるはずがない。なら私は、はみ出たパズルを元の場所に戻さなければならないのだ。

彼女は、私の人生で初めて異性なのに惹かれた人。もしそうなら、私は彼女となら生きていけるかもしれない。

私は彼女の下の名前も、仕事も趣味も、踏み入ったことは何も知らない。ただ温泉の出入口で会う関係。なら、出入口で落としてやる。

私から好意を持つことは無かったが、女性とは触れ合ってきた。女性がどんな生物か、どんな風に接するべきか。彼女らが私を恋愛対象として見るときどんなことをしているか…。

私は次会った時、少々踏み込んでみることにした。

「趣味、ですか？」

微かに雪が降る日、私は思い切って彼女の趣味を聞いた。少し考え込んだが「あるにはあるんですが、恥ずかしいですね」と笑った。続けて彼女は、

「強いて言うなら…お洋服とお化粧品です」

と、なんとも女らしい答えを返してきた。

「素敵ですね。お洒落ですからね、…佐々木さん」

「えっ」

急に名前を呼ぶのは気持ち悪かったのだろうか。そう思いながらじっとりとした手を握



った。

「…そうか、前にタクシーの運転手が言ってましたもんね。急に呼ばれたのでなんだかドキドキしちゃいました」

「あ、いえ…気安くすみません」

「いいんです。では私も名前を伺っても？」

「あ…立花です」

「立花さん、ですね。ふふ、たくさん話してるのに初めて名前を知るなんて、少し変わってますね」

いつもより口数が多い彼女に驚きながらも、不思議と嫌ではなかった。彼女から、あの特有な気持ち悪さが感じられないからだろうか。これが男女の友情というやつだろうか。

「そういえば、新作のメニューは食べました？鍋焼きうどんの」

「ああ、食べましたよ。その後に出てくるご飯も美味しかったですねえ」

鍋焼きうどんは昨日出たメニューだ。そして私は昨日、出入口で彼女と会ったにも関わらず、食堂で彼女を見ていない。

なぜだ？

「それでは、また」

「今日はタクシーじゃないんですね」

「あれはプチ贅沢ですから」

軽く会釈して彼女は歩いていった。それを見送りながら私は頭を振る。

男女の友情なんて感じている場合ではない。私は彼女を落とさなければならないの

に。

ため息をついて私も家に帰ることにした。

ガチャ、と開けた玄関は相変わらず侘しい。リビングに真っ直ぐ繋がる通路を歩いて座椅子に座る。

そういえば彼女と出入口では会うが、温泉の大広間で会ったことは無いな…。私も長風呂の方だが、彼女もよっぽどなのだろうか。

「はあ…」

どうすれば彼女を落とせるか…。趣味は服と化粧。化粧品でもプレゼントすれば…いや、でも系統がわからない。服も好みがあるだろう。当たり障りのないプレゼントか…。

会社のパソコンを開きながら考える。私は初めて好きになった同級生のことを思い出

していた。ちょっとした会話にも気を遣い、相手の喜ぶことならなんでもしたい。避けてくるしかなかった青春を取り戻しているようだった。明日ミーティングだというのに全く身が入らない。そういえば容量がそろそろ不安な USB も買っていない。

「恋愛って大変なんだなあ…」

短針と長針が合った朝の八時。古典的なボンボンという音が響いた。

「しまっ…………！！」

た、と言うにはもう遅い。ミーティングは九時半から。資料の一枚も終わっていない。案の定後輩からは心配のメッセージが届いていた。

座椅子に大袈裟に体重を預け、今日は会社を休もうと決めた。私が居なくてもどうせ成り立つだろう。出世の椅子は遠のくが、今の私にはこの座椅子があればいい。

「そうだ」

どうせ休むのだし、朝から温泉にでも入ろう。ゆっくり肩まで使って上がったら味噌

ラーメンに味玉をトッピングして…。

…彼女は、いるだろうか。

雨が降っていた。風呂は気持ちよかったし、味噌ラーメンは美味かったが、味玉は  
いらなかった。

「…休んじゃったな」

今になってその事実を確認した。欠勤の連絡はしたものの、上司に一体どんな顔をされるか。

しゃがみ込んだ私に、ふ、と影がかかる。「大丈夫ですか？」と「クキ」が喋った。

「佐々木さん…」

「何かあったんですか」

「……会社、休んじゃって」

「あら…」

「…立花さん」

「はい？」

「うち、来ますか」

「ポキ」と折れた。

「どうぞ、何も無いですけど」

「あ、いえ、…あ、この傘」

「ふふ、初めて会った時のやつですね、それ。百均なんですよ」

「え!？」

こんなにオシャレなのに、と言うと佐々木は笑った。

「私も好きです。嬉しい」

ドキッとした。好きと言われたのに、全く気持ち悪くなかった。震える膝で居間へと入る。

「コーヒーと紅茶、どちらが好きですか？」

「そんな…。では紅茶を」

「はい」

お湯を沸かす音が心地良かった。私は会社をサボり、好きな女の部屋に座っている。白くてさっぱりした部屋だった。女の部屋は来たことないが、こんなもののだろうか。

「誰だって休みたい時はありますよ。その時に休めたんですから、立派です」

紅茶をふたつ置き、私の隣に座る。初めてまじまじと顔を見たかもしれない。



鼻筋がよく通って、目は少し離れている。首の骨がしっかりしていて、でも手先は綺麗だ。

「悩みでも？」

「あ、いえ…」

私は固まったが、この機会を逃してどうする、と己を奮い立たせた。言え、言うぞ、言え、言え、言え言え言え。

「私……………あなたが好きなんです」

「……………えっ」

私に告白してきた女たちもこんな気持ちだったのだろうか。

こんなに不安で、でも興奮して、今しかない、伝えるしかないと思って私に手紙を渡したのだろうか。

「……………立花さん」

「…はい」

人生で初めての告白。でもこの流れが、きっといいものではないとわかる。

「……………私は、謝らなきゃいけないことがあります」

「…はい…？」

「……………私……………」

そう言うと、佐々木はおもむろに髪の毛を引っ張った。

「何を…っ……………え？」

黒髪でロングヘアの中からは短くて、両脇をバリカンで剃った金色が出てきた。

「私、…いや、俺、女装が趣味の男なんです」

『強いて言うなら…お洋服とお化粧品です』

そうか、私が佐々木と出入口以外で会わなかったのは、佐々木が大浴場ではなく「家族風呂」に入っているからだったのだ。

家族風呂なら、飯は個別で食べれるし、女の格好で入って脱ぐ。そして女の格好で出てくる、容易いだろう。

「……だから、……………あなたとはお付き合いできません…」

折角綺麗に整えた目元が涙で滲んでしまっている。そっと指で拭くと、「佐々木さん、私も謝らなければいけない」と伝えた。

「私は、同性愛者なんです」

「えっ…」

「…あなたのことは女性だと思っていた。でも、本当は男性が好きなんです。フツウ  
にならなければと、女性と結婚しなければ、と」

「……」

「でも、あなたは女性として私の前に現れた。私は初めて嫌悪感を感じない女性に会  
ったと思った、初めて好きだと思った…。不思議だったけど、あなたが男性だったか  
らなんです…」

「…たちば、なさん……」

「私は、りく、…りくといいます。あなたは？」

「……うみです…佐々木、うみといいます…」

「りくとうみ、素敵だと思いませんか」

「……………そうですね…」

佐々木—…うみは泣きながら笑った。私も泣いていた。

私はこの人と生涯生きるのだ。腕の中で笑うこの人と。周りになんと言われようと、私はこの人と生きる。

これが私たちの「フツウ」なのだ。